

常射之卷

四

一貫流射術常射之卷四

目錄

射場之部

大的場 圖一品

小的場 圖二品

圓物草鹿射場 圖二品

筒結場

武利武利場

遠的場

布革 圖三品

一貫流射術常射之卷四

射場之部

大的場 圖一品

流傳曰大的場トハ大的ヲ射ル所ノ惣名ナリ延
喜式ニハ射場トアリ東鑑ニハ弓場ト記シタル
所モアリテ皆大的ヲ射ル場ナリ則弓馬故實ニ
射場とは的を射る惣様の場と云也當時はあつ
ちを射場と云ゆめく云ましき事也然間塚をは
つく^築と云弓場をこしらゆると云なりト見エタ
リサレハ射場ト云フモ又弓場ト云モ的場ト云

モ其唱ハ異ナレト其作形ハ異ナルヘカラス但
シ大的場ト云ハ近キ世ノ事ナラン東鑑ニ大的
ト云名不見温故之卷ニ委シケレハ爰ニハ畧ス足利時代小笠原
家ノ古書法量物鬮的聞書等ニ大的ノ名見ヘタ
レハ大的場ト云ハ足利時代小笠原家ヨリ云出
シタル詞ナルヘシ又遠的場トモ云ナリ太平記
ニ遠的場トアルハ別論ニテ大的場ノ更ニハア
ラス温故之卷ニ委シク評シタレハ合見スヘシ
遠的ト云名足利時代ノ書ニモ不見小笠原家ノ書ヲ云ナリ
猶近世ノ俗称ナリト知ヘシ左ニ大的場ノ製作

ヲ出ス熟見スヘシ

一 的間遠^サノ事鬪的間書ニ的場の遠の事本式昔は

^{*1}
つえ

三十三杖に打て三十二杖に串を立る事本也公
方様の御的二十五杖にて鹿花院殿御時此分に
てあり当座に於て廿五杖迫きとて二杖のはさ
せられて二十七杖になされ候也亦三条の御所
にては二十一杖にて射させられたる冓もあり
又近來は廿三杖に打て廿二杖に串を立たる也
今に廿三杖也ト云云法量物ニ見ヘタル所モ三
十三杖トアリ是レ三十三杖ニ打塚ニテモ布皮

*1 つえ・二・二七メートル
(現代弓道講座:544配本より)

06/01/14.

ニテモ一杖ヒカへのヲ立テ二十二杖ニテ射ル
ヲ定法トシタレト昔モ今當モ同シ事ニテ射述
ノ精キ人モアレハ又拙キ人モアリ肩ノ強キ射
手アレハ弱キ射手アリテ一様ニ揃サルハ勿論
ノ義ニテ射事拙キ射手或ハ弓勢ノ弱キ者ハ此
間数ニテハ矢ノ的迄及サル叟モアリテ煩シケ
レハ二十五杖ニ取縮メ或ハ二杖延シテ二十七
杖ニテ射サセテ其程合ヲ考へ二十三杖ヲ以テ
此的ヲ射ル間数ノ至極トセリ今當モ二十三杖
二十五杖ニテ射ルヲ定法ノヤウニナリタレハ

二十三杖二十五杖ニ数塚ヲツキ射手ノ並ヘキ
弓立トスヘシ又的間ヲ定ルハ弛弓ニテ打ナリ
其打様ニヨリテ少シツ、遠近アリ鬪的聞書ニ
的間三十三杖に打つむると申ばしかと打つむ
るを申也又杖のかさりと申事有打て行に少宛
打たる弓ほこの内へ少つ、本筈をつき入て打
て行は的間近成へし杖のかさりと申は此事也
秘説也いづれもはつし弓にて打へし口傳有へ
しト見ヘタリ如此態々本筈ヲツキ入ス凡其打
タル一杖ノ卯惰弱ナレハ己モ不知自然短クナ
シルシ

リ少シ宛トハ雖打詰タル所ニテハ大ニ近クナ
リ打ン時ハ心ヲ用ヘテ打ヘシ又弓杖ニ長短ア
リ古代ノ弓ハ其主ノ高計尺ニテ七尺五寸ナリ
此七尺五寸ヲ曲尺ニ直シテ積レハ曲尺七尺五
寸ヨリ延タルモアリ縮タルモアリテ長銚ノ弓
ヲ以テ打時ハ少シ宛ニテ間数ヤ、延テ遠シ又
銚詰ノ弓ヲ以テ打時ハ自然間数縮テ打詰タル
所近シサレハ古代ハ弓杖数二十三杖二十五杖
ト云レ間数ニ直シテハ遠近アリテ難計今當ノ
弓ハ曲尺七尺三寸ヲ並銚ト定メタレハ並銚ノ

弓ナレハ敦レノ打タルモ其打ヤウ正シケレハ
二十三杖ハ二十三杖二十五杖ハ二十五杖ニテ
間数ニ直シテ是ヲ積ムトモ遠近ノ差ナシト知
ヘシ

一 堀ノ事芝草ヲあつちノカラミタル土ヲ長サ一尺幅八

寸斗厚サ二寸斗芝草トハ河原苔ト云ツル草ノ根
ニ土ヲ付タル也 高ク積ミ上ケ矢ノ散乱セサル

爲ノ矢止リナリ其高サ廣サ定リナシ則弓馬三
冊ニ昔大的をもかけすかして射来る也あつち
とて近年芝にてつくへき事に定りたる也され
ばあつちの寸法不可有殊に小塚と云物近年の

事也但小的なと射つ時矢の爲は小塚有なかよ
き也鬮的聞書ニあつちの寸方しては本式はな
き物也但串を立大的をかくる串の廣高より少
ひろくたかく有へしト見ヘタリ右二書ニモ高
サ廣サノ寸法ナシ元來芝士土ヲ高ク積上ケ矢ヲ
防ノミヲ用トシタレハ制定寸ナトアルヘカ
ラサル義ナリ只矢ヲ防事ノ便利ナルヲ肝要ト
スヘシ諸書當用抄ニ的山高さ七尺五寸廣弓杖
一杖半又壺丈五尺もあつさは三尺土臺^台少廣つ
くへし皆是秘事なり口傳ありトアルハ其寸法

ノ大概ヲ記シタルニテ別ニ秘事口傳ナシ彼ノ
流風ニテ堀ニ寸法ナク其大概ヲ記ト云々ヲ奥
深ク秘事口傳ト記シタレハ迷フヘカラス又塚
ト云名義詳ナラス一貫按スルニ安津知ハアテ
ツチノ中畧ナランカ的土塚南山等ノ文字ニ拘
ハリテ義ヲ付タルハアタルヘカラス又的土ヲ
南山ト書ヲ俗説ニ北矢落ヲ忌ト云事ヨリ南矢
落ヲ可トスレハ南山ト書ナリ是ハ天子南面ニ
坐シ玉フニヨリテ朝威ヲ敬伏シテ向ツテ弓ヲ
引サル心ナリト云ヒ或ハ北ノ字ハニクルト訓

・：にげる 05/10/07.
(文例：敗北)

ス故ニ是ヲ忌テ北矢落ニセサル物ナリト云或
ハ北ノ字ヲニクルト訓スルヲ忌ハ悪シ北ルヲ
射ノ心ニセハ矢落苦シカラスト云説モアリ此
等ハ愚俗ノ傳來ニテ頑愚ノ至ナリ用ユルニ足

ラス 但シ棚ナキ所ニテ大的ヲ射ニハ布皮ヲ用
ヘシ布皮ノ制ハ別記ニス温故之卷ニモ出ス

一 矢取塚矢守塚ノ事的ノ後ノ方ニ芝士土ヲ高サ三
尺斗ニ積上ケ土手ヲ作り此陰ニ矢取矢申再拝
振ノ居ル所ナリ故ニ矢取塚矢守塚云ナリ
鬮的聞書ニ矢取も矢まはしする者も的の方に
在へし同さいはいふり申者も後に在へし射御

持長記ニ矢取は的の後に可居さいはいふりも
後に可居トアリ如此矢取矢申再拝振ノ在所ハ
見ヘタレト矢取塚矢守塚ナト云名ハ不見貞丈
先生ノ大的式的場ノ圖中ニモ矢取矢申再拝振
ノ居所ハアレト此塚ハ記サレス小笠原家ニテ
ハ矢守塚ハ作サル事ナレト源順ノ倭名抄ニ射
立温故之卷
ニ委シト云名モ見ヘタレハ其場ノ廣狭ニ
モヨル事ナレト狭キ所ナトニハ作ルヘシ此塚
ハ散乱セル矢ヲ防クマテノ用ナレハ何ト成リ
トモ造ヘシ定寸定制ナトハアルヘカラス

一 数塚之事小キ砂ヲ編笠ノ形ノ如ク丸ク前後二

盛り番ノ射手ノ

祐方云番ノ射手トハ前弓
後弓二人ノ射手ヲ云ナリ

立へ

キ弓立ナリ今當述的ナトノ時踏芝ト云所ナリ

鬪的聞書ニ数つか置様の事先の通りの前に

射手ま中に立様に数塚を置也前の数塚より後

の間はつし弓にて一杖に打て前の数塚より一

尺五寸後の数塚を的の方へよせて置也数つか

の高さ一尺貳寸根のまはり地きはの分三尺上

へむけては肩すはりにすへし後前の数塚の間

一杖とは申せとも八尺にも間をする也亦は所

によるへし弓馬故實ニ数塚の寸法の事迫り三
尺斗高さ一尺二斗也大的の時弓立の方にすな
にして二有物也うしろの数つか一尺五寸的の
方へ寄る二の間弓杖一つえに打へしト見エタ
リ後ノ数塚ヲ一尺五寸的ノ方ニ進ミテ作ルハ
射場殿ヨリ後ノ射手ノ見能キ爲ナリ又是ヲ数
塚ト云ハ百手的ノ時矢数ヲ失念セントタメニ数

串 数字ノ事鬮的聞書ニ五度の時数さす串の寸
方の事しの竹を上の皮をこそげて長一尺式
寸にして黒ぬるへし数百又は竹をけつりても
すへし長サ同前又は長サ八寸にもすへしふとさは
白箸のふとさにて有へしト見へタリ又的出張
記ニ数つかと云は歩射の時数をさすによりて

の名也弓太郎の彼にしてしの竹の長一尺二寸
切て黒くぬりて置也ぬらぬも有へし前後共に
数つかのきはに五十ツ、置也トアリ串ヲ作り
テ出スハ弓太郎ノ彼ナリ数塚ニ串ヲサスハ射
手銘々ニサスナリ串ノ数ハ百手のノ時ハ二百
アルヘシ五十ツ、四度ニ出スナリ以上二百也

ヲ此砂ニサシテ其数取ヲスルナリ故ニ数塚ト

云ナリ則的出張記ニ数塚と云は歩射の時数を

さすによりての名也トアリ貞丈先生曰按スル

ニ上古ハ正月御弓場始以下ノ御的ニハイツモ

数串ヲサシタルナリサレハコソ数塚ヲ必スツ

カル、也後ニ数串サス事ヲハ略セラレシナル

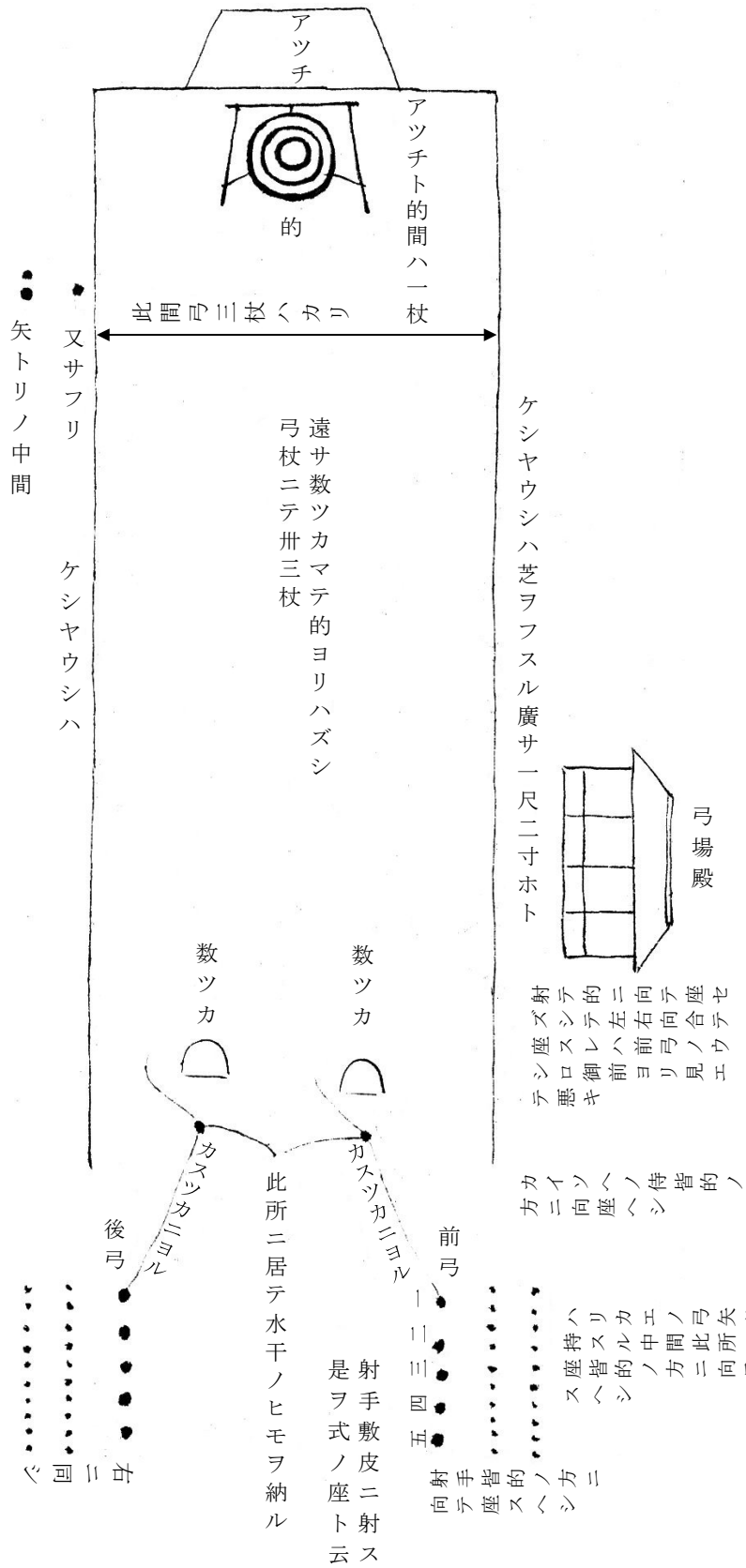
ヘシサレト其古風ヲ殘シテ数塚ヲ必ツカル、

也百手ハ別テ式正ノ事ナル故是必数串サス事
ト見ヘタリト座右書ニ注セラタリ考ヘシ又射
御持長記ニ前の数つか中に石を一ッ入る也数塚
こぼして後に弓せきとて射手の可立通前に置
也トアリ数塚ヲコホツハ大的ノ時セルニハア
ラス鬮的ノ時コホツ夏アリ小的場ノ条ニ委ク
記ス往テ見ルヘシ

一弓場殿ノ事主人出座アリテ射事ヲ見給フ所ナ
リ小笠原家ノ古書ニ弓場殿ト云モノ見當ラス
貞丈先生ノ大的式射場ノ圖ニ弓立ノ前ノ方ニ

弓場殿トアリサレ其造様間数等ハ何トモ記シ無之至テ粗シ、時宜ニ應シテ便利ニ作ルヘ

シ



右ニ摸写シタル大的場ハ伊勢氏ノ大的式ニ出
タル圖ナリ

小的場

流傳曰小的場トハ小的ヲ射ル所ノ惣名塚数塚
弓場殿射手小屋何モ彼モ都而ノ名ナリ元來小
的ト云モノハ古ヘハ津久羅ト云モノ、小口ニ
掛テ射タルモノナレハ小的ノ塚ト云モノハ後
世ニ作りタルナリ則鬮的聞書二本はあつちと
てはなき事也つくらの的を立て射たる也弓馬
三冊に塚といふはつくらの事也是塚の本也昔

はつくらをあなたこなたへもちありきて小的
を立たる也つくらの塚と云事人の不知也ト見
へタリ古代ツクラノ小口ニ的ヲ掛テ射タル明
證ヲ知ヘシ按スルニ其間数ハ如何ニモ近クシ
テ漸ク弓丈一二丈ニテ何方此方ニスヘ置修行
セルモノナレト廣キ庭ナトニテハ間数ヲ延シ
弓丈十四五丈ニモシテ射ルモアレハ未熟ノ
射手ハ云ニ不及時トシテハ然ルヘキ射手ニテ
モアヤマチテ津久羅ヲ外シ左右上下ニ矢ノ散
ルモ莫アレハ草鹿丸物ナトノ塚ニ津久羅ヲ置

テ射タルヲ後ニハ津久羅ヲ不用小塚ナト云モ
ノヲ作り別ニ小的場ト云射場ヲ設ケルヤウニ
ナリタルモノナランカ左ニ小笠原家ノ古書ニ
纒わづかニ見ヘタル所ヲ掲ル見ルヘシ

一的ノ遠ノ事弓馬故實ニ弓場たけと云事昔は小
的の遠サ十八杖程也さりなから今はそれほとは
遠き間十七杖六杖ほと可然其ほとらるをはか
らひて弓場長と云なりトアリ是レ小的ニハ間
数ノ定リナキ物ニテ其人ノ射術ノ精粗弓勢ノ
強弱ニヨリテ近モ遠モ心任ニセル事ナリ今當

ハ十五間ヲ小的場ノ間数ノ定法ノヤウニナリ
タレト遠モ近モ心任セニ作ルヘシ定法ナシ

一 塚ノ事大的ノ堀ニハ小塚ナシ小的ノ的山ニハ
細ナル砂ヲ堀ノ前ニ丸ク盛り掛ケ小塚トシタ
ル迄ノ差別ニテ其余ハ大的ノ堀ニ異ナルヘカ
ラス則弓馬三冊ニあつちの寸法不可有殊に小
塚と云もの近年の事也但小的なと射る時矢の
爲には小塚有るかよき也是はかせ総の外の事也小
塚と申せはくて大塚とは云ましき也ト見エタ
リ小的ノアツチニハ小アツチト云モノ、アル

夏ヲ知ヘシ此小塚作サレハ芝草ノ搦根切レテ
土斗ニナリ塚至テ弱シ且アウヘ板附拔去リ矢ノ爲
ニモ小塚ナキハ悪シ小的ノ塚ニハ必ス小塚ヲ
ツクヘシ利用ナリ

一矢守塚ノ事小笠原家ノ古書ニハ見ヘサル小
的場ハ大的場ヨリ惣躰狭ケレハアヤマチテ射
損シ矢ノ散ル事モアルヘシ其用心ナレハ的ノ
後ノ方ニ大的場ノ矢守塚ノ如ク必ス作ルヘシ
タトヘ定法ニハナキ事トテモ是レ作りタレト
モ何ノ障モナキ事ナリ可考

一 数塚ノ事大的場ノ数塚ノ如クツキヤウ寸法等
異ナルヘカラス但シ射御持長記ニ前の数つか
の中に石を一ッ入る也数塚こほして後に弓せき
にて射手の可立通り前に置也ト見ヘタリ数塚
ヲコホツハ鬮的ノ時射手十人ヨリ多勢十一人
ニナレハ数塚ヲコホツナリ則鬮的聞書ニ数塚
の有時鬮的を射る前後の数塚の通りに矢代を
ふりて射へし少前へ出すへし射手は十人して
射る也十一人ともならば数塚をこをすへし弓
馬三冊二数さゝざる時も十人射るとは数つか

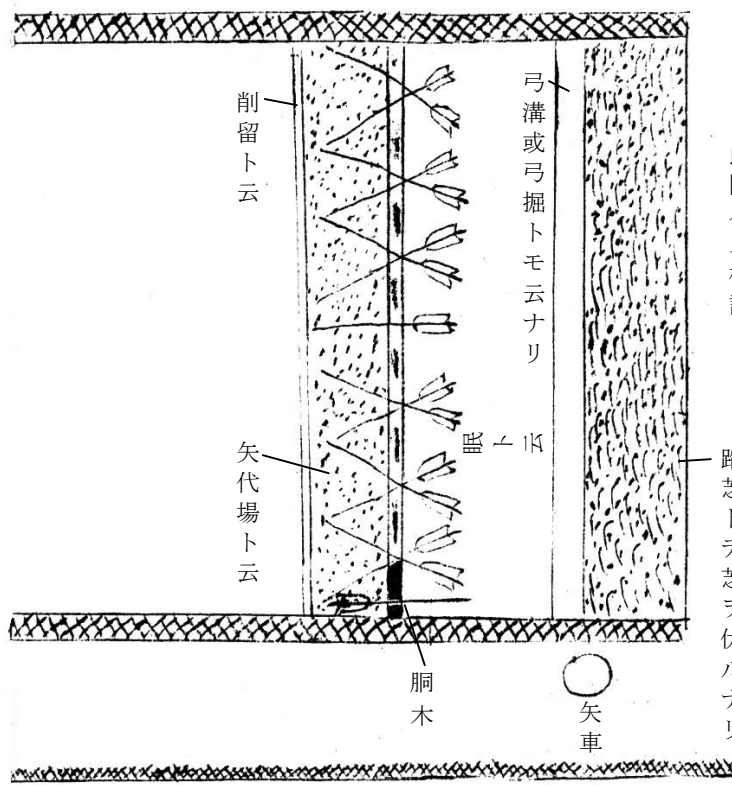
をは其まし置て矢代をふりて射る也又云十人
に餘らは数つかをくつして矢代を前振ト見エ
タリ如此数塚ヲコホチタル時此頃ノ小的場ニ
ハ踏芝ト云モノヲ不儲射手ノ立所紛ハシケレ
ハ弓立ノ卯二石ヲ前ノ数塚ニ入置タルナリ又
矢代之記 記者詳ナラズ
小笠原ノ書也 二洞木ノ前ニ矢代ヲフ
リタル圖アレハ数塚ヲ築サル時ハ此洞木ヲ入
テ弓立トセルモアルヘシ

一弓場殿ノ事是モ小笠原家ノ古書類ニ不見當貞
丈先生ノ草鹿圖物等ノ射場ノ圖ニ見ヘタレハ

小的場ニモ作ルヘシ其作り形ハ大的場ノ射場
殿ノ如造ヘシ

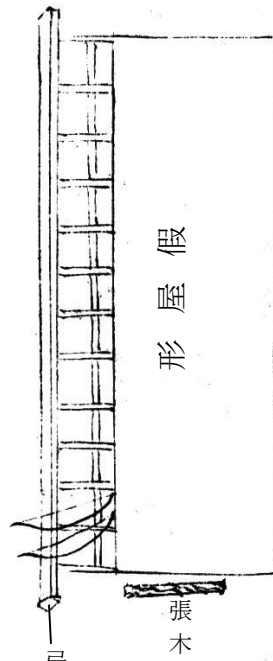
右ニ述タル小的場ノ制作ハ足利家代小笠原家
ノ古書ニ拠テ記シタル所ナリ又近世梓ニ行タ
ル武用辨畧射法一統ナト号スル書ニ述的ト云
私ノ射法ニヨリテ制作シタル的場ノ圖アリ便
見ノタメ爰ニ其圖ヲ摸写ス

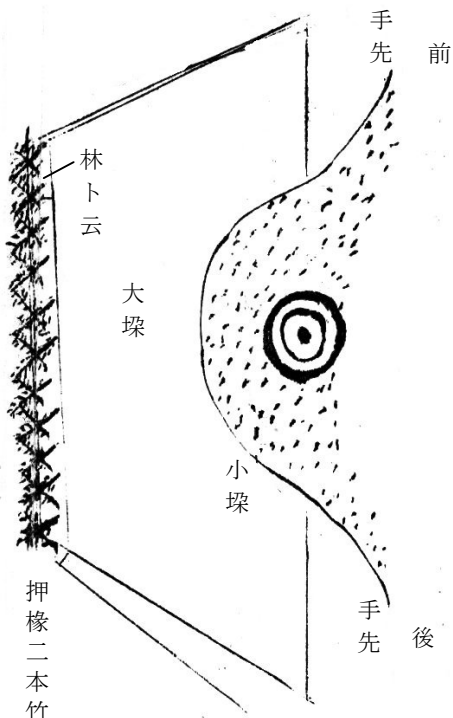
武用辨畧小的場ノ圖



此間ハ二杖計

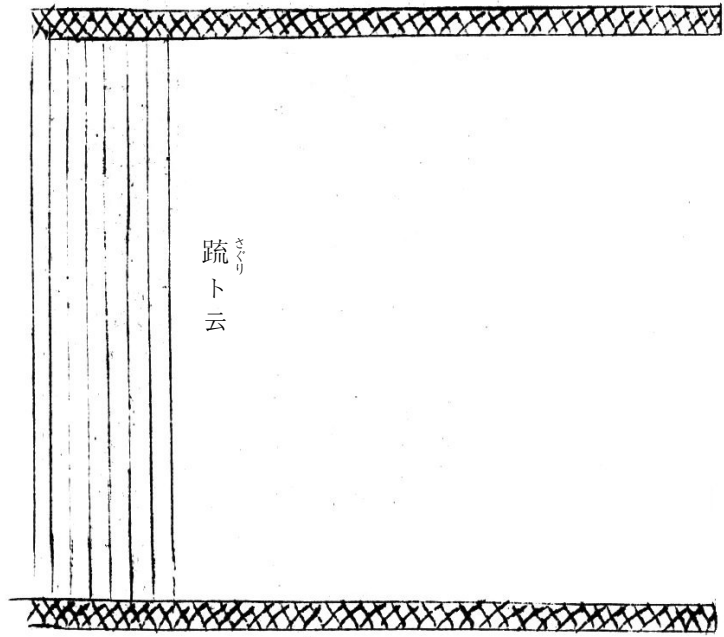
踏芝トテ芝ヲ伏ルナリ





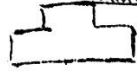
押椽二本竹ナリ

華粧化沙ト云也
小塚ノ内ノ沙ハ



矢取道

細ク乾ヲ伏ルナリ



矢取塚

右ニ摸写セル所ハ武用辨畧ニ出タル小的場ノ
圖ナリ述的ナト、云私ノ射法ニヨリテ人々ノ
好事ノ巧ヲ以テ作ル事ナレハ其說區々ニシテ
更ニ一様ナラズ右圖中ニ見タル名所ヲ左ニ出
シテ評註ヲ考ヘシ

一 的間數ノ事或書二的ノ間上古ハ廿一杖又八十
九杖ニテ是ヲ射タリ近世人ノ弓力減シテ今十
五間大格トシ法式ノ如云侍也トアリ或書トハ
如何ナル書ニヤ其冊号ヲ記サレハ詳ナラス或
書トマテ記スホトナレハ明然ト其書名ヲ顯シ

タキモノ也何ノ秘書ニテ書名記シカタキ書ナ
ルヤタトヘ秘書ニモアレ其文意ヲ出シタレハ
書名ヲ藏シタリ_レ何ニモ成ラサル義也無利ニ
書名ヲ秘シタルハ拙キ心也若シ冊号モナキ書
ナレハ證拠ニハ難信偽説ト云ヘシ上古ハ二十
一杖又ハ十九杖ニテ是ヲ射タリトアリ上古ト
ハ何頃ヲ差テ云タル事ニヤ小的ト云モノハ東
鑑ニ不見漸ク足利家代小笠原家ノ書ニ見ヘタ
レ_レ 氏 温故之卷ニ
委ク評タリ 二十一杖十九杖ニテ射タル_レ 叟
ハ不見當恐ラクハ義後 武用辨畧ノ記者
木下義後ナリ 力自考

忘説ナランカ又近世ノ人弓力減シテ今十五間

大格トシ法式ノ如云侍也トノホウケン謗言ハ何亼ソヤ

如右書名モ記シカタキ書ヲ本證トシテ二十一

杖十九杖ヲ古法ノ如ク記シタルコソ片腹痛キ

事ナラメ今當十五間ノ間數ハ甲武者ヲ射ルノ

間合ナリ諸的類ヲ射ハ甲兵ヲ射倒スノ楷梯ノ

修行ナリ甲武者ハ弓杖三四杖ニ近ク引付死生

ヲ忌レ唯一筋ノ矢ニテ勝負ヲ決スルヲ武士ノ

本意トスレハ十五間ノ外内ニテ的中ノ筋中ヲ

得ハ物士ノ射事ハ事足りタレハ十五間ノ射間

合ニテ至極セリ可考

一假屋形ハ高位ノ人ノ射事ヲ見給フ所ニテ弓場
殿ノ事ヲ云ニテ的場ノ前ノ方ニ作ヘシ如圖踏
芝ノ後ニ射手小屋ヲ作ルモノナレハ射手小屋
ノ事ヲ假屋形ト記シタルハアヤマリナリ

一弓懸ノ埒ハ貫ヲ通テ笠木ヲスル也此高サ地ヨ
リ六尺計也柱ハ間中ニ一本宛立ヘシ笠木ニハ
釘ヲ打テ弓持ヲスル也右此衝ノ上ニ懸ヘシト
アリ是等ノモノニ定制理害得失ノ論ナシ何ニ
ト成リ忒時宣ニ任セテ作ヘシ

踏芝ハ九尺計ニシテ横ハ胴木ノ長也是ヲ指テ
弓立所ト云圖ニ黒ハ胴木也踏芝トモ間ハ一杖
計也トアリ前ニモ引用シタル如ク古代ハ数塚
ト云モノヲ作り是ヲ弓立トシタレハ踏芝ト云
モノ無之踏芝ハ近世ノ事ニテ的場ノ觀美ニ作
リタルモノニテ数塚ヲ用ル時ハ別ニ芝ヲ伏テ
踏芝ヲ作ニ不及

一 胴木或筒木ニ作太キ竹ニテモ伏ル也或ハ又大
綱ヲモ用ル也扱あ伏し様ハ筒木ニ穴ヲ明テ木ヲ削
中へ打込侍也七所打ナル良ト云リ扱又胴木ノ

真中ニ膜股ノ有木ヲ打也其ヲ眠串ト云眠矢代ヲ
持置故也膜ノ長一寸計但一方ヲ短スル也此筒
木ト削留トノ間ハ矢代場ト云テ沙すなヲ敷也削留
ハ竹ニテモ又ハ石ヲ疊作モスル也トアリ今
當京的江戸的ナトノ時此胴木ニ矢代ヲ持セ掛
テ振ル故ニ矢代枕トモ云ナリ前章ニ引用タル
矢代之記ニ見ヘタル如ク古代ノ胴木ハ射手ノ
立ヘキ所ノ卯シ弓立ナリ矢代ハ胴木ノ前的ノ
方ニフリタリ古今ノ差アリ又古代ノ的場ニハ
矢代場ト云モノ無之矢代ハ只数塚ノ前ニフリ

タリ此矢代場ト云モノハ的場ノ莊而已ニテ不
作トモ濟ヘキ所ナリ

一 䟽さぐりト云物ハ箭下テハク矢ヲ留ル用也切様ハ弓
場ヘ向テ片䟽ニ切ヘシ何モ鴈木ノ如ク切也小
塚ノ手先ノ廣ト等カルヘシ数ハ七也四方ニ切
タル良トストアリ此䟽ト云小笠原家ノ書ニハ
不見是モ近世ノ事ニテ好事ノ所爲作りタリト
害ニモナルヘカラス心任ニスヘシ
矢取塚ノ事ハ高三尺サ長ハ三尺餘ニ築ヘシ二壇
ニシテ矢取二人腰ヲ掛テ居様ニ拵侍也後ノ廣

ハ一尺六七寸計タルヘシ小塚ノ手先ヨリ弓一
杖餘後ヘ寄テ築タル良トストアリ小笠原家ノ
書ニハ矢取塚ト云モノ不見定法ナトハ有ヘカ
ラス何トナリトモ作ヘシ

小候ヲハ大候ニ打付テ築也成ハ半月ノ如共ニ
前ノ圖ニテ了簡アルヘシ塚小塚ノ寸法ハ塚ノ
高八尺五寸廣地際ヨリ一杖也上ノ廣八尺厚ハ
後ヘ六尺餘ニモスヘシ次第ニ後ヘ低ク負ノ成
ニサケテ築ヘシ小塚ハ高三尺七八寸厚三尺餘
ニ双ノ手先次第ニ細ク低築ヘシ肩ヨリ手先迄

ノ間長八尺五寸ナリ手先ノ双ノ廣ハ射塚ノ地
際ノ廣也但少ハ内端ナルヲ好トストアリ前ニ
述タル如ク古代ノ塚ニハ定寸ナシ寸方ヲ定メ
タルハ近世ノ事ニテ大小ハ所好ニヨリテ心任
セニ作ヘシ又塚ノ上ニ林ヲシタル圖ナリ是モ
莊ニシタル事ニテ何ノ用モナキト知ヘシ
右八个條ハ武用辨畧ノ説ヲ評ニタル所ニテ近
世ノ的場ノ制作ナリ又射法一統ニ見ヘタル小
的場ハ是ト小異アレハ左ニ圖ヲ出ス

御立間	一段ヒクシ	下壇
-----	-------	----

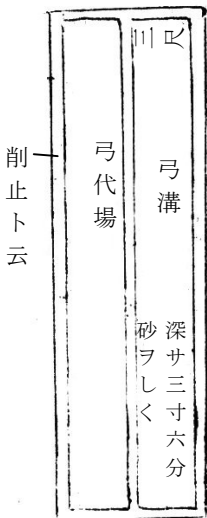
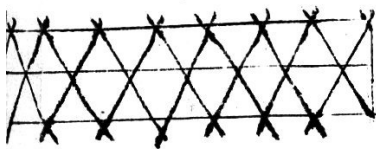
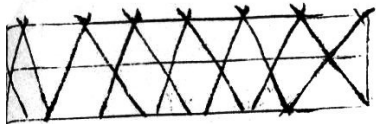
惣名見物小庭間數不定

惣ヲ世ニ胴木ト云
ハ誤ナレトモイヒ
ナラハシタレバ也

長は人数次第
已然高一尺二寸

五尺五寸

此之ノ際ノ數全ク



削止ト云

弓代場

深サ三寸六分
砂ヲしく

是を胴木と云はあやまり也

踏止所是ヲ扇ノ曲尺ト云也

是を胴木ト云也

幕面しの家の紋

ヤラヒ

○ 矢車

幕中ノ此ノ尺ノ數全ク



射手小庭
間數不定此ノ多分に隨ク

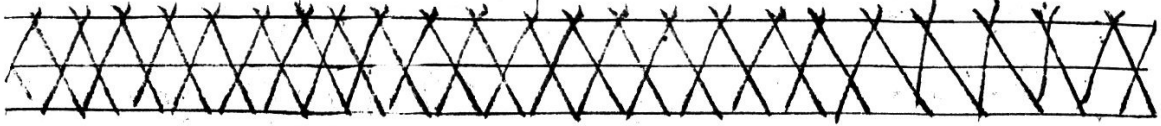
入口

幕

ヤハム

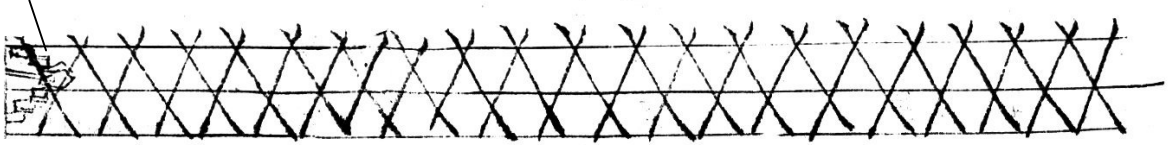
垣高一尺二寸

八幡堀



此幣四季ノ色々ヲ立ヘシ

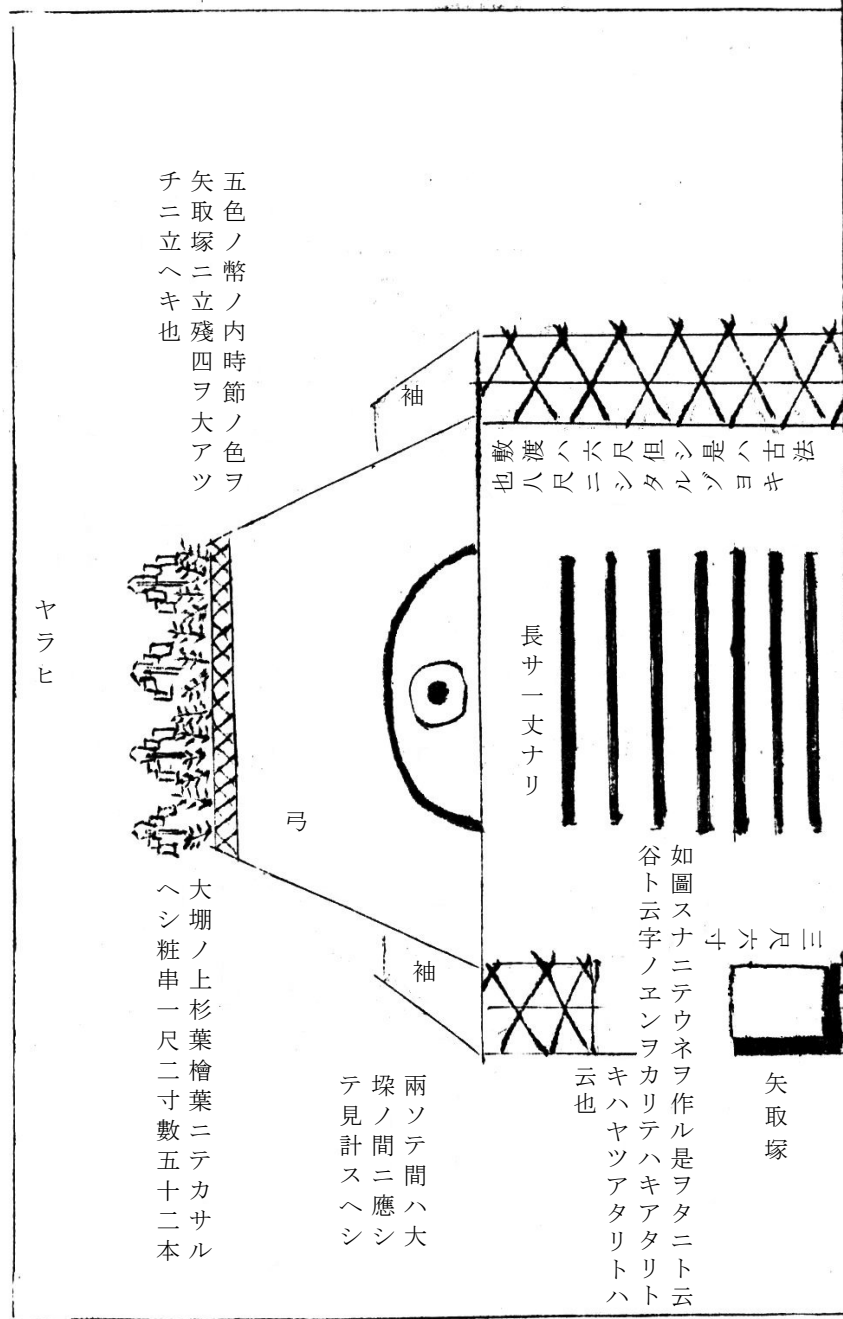
距止ヨリ小株ノ際定式十五間也



垣高一尺二寸

ヤハム

右ニ摸写シタル小的場ノ圖ハ射法一統ニ見ヘ
 タル攸ナリ武用辨畧ニハ巡リノヤラヒ見物小



屋八幡堀塙ノ左右ノ袖上ニ幣ヲ不指其外蹈芝
ノ作り様射手小屋ノ在所弓懸ノ在所異ナリタ
リ此余ハ大同小異ナレハ別ニ評註ヲ加ヘス武
用辨畧ノ評註合セ見テ取捨アルヘシ此外流名
ヲ置タル一家ノ書ニ的場ノ圖三四品見ヘタレ
右二書ニ大概異ナラサレハ畧也

圓物射場

草鹿射場

流傳曰圓物ノ射場ト云モ圓物ヲ射ル場所ノ惣
名ナリ草鹿ノ射場ト其制異ナラス前章ニ出シ
タル大的場小的場ノ制ニ大様ハ同シト云トモ

小異ナレハ左ニ小笠原家ノ古書ノ類ニ見ヘタル所ヲ掲ル

一圓物草鹿遠サノ事法量物ニあつちの遠さ弓杖十

一杖に打て十杖に可立串とあつちの間一杖に

少ちかし射鏡

文明十年三月十日細川右馬頭政國多賀豊後守高忠小笠原民部太

浦之長等ノ奥書有之

二圓物のあつちの遠さ十一杖に打

て十杖に可立あつちと串とのあはひ矢たけ二

たけより少近かるへし小的事ニ

年月不知波々伯部因幡入道

京岳ノ各有之細川高國自筆本写之云云

あつちの遠さ弓杖十一に

打て十杖に草鹿を懸へしト見エタリ此三書ハ

小笠原家ノ古書ニテ同流ノ説ナレハ異ナルヘ
カラス但シ法量物ニ串ト塚ノ間一杖ニ少近シ
トアリ射鏡ニハ矢タケニカテヨリ少近シトア
リ此等ハ小異アリト云トモ鎖細ノ事ニテ遠近
ハ其場ノ廣狭ニモヨル義ナレハ等シカラス其
場ニ應シテ見計ヒ定ヘシ

一 塚ノ事芝ヲ積ミ上テ築ヘシ築様大的小的ノ塚
ニ異ナラス高廣^ササ鬮的聞書ニ丸物草鹿のあつ
ち是も本式寸方とてはなき物也串の廣さ高^サよ
りは少ひろくたかく有へしトアリ

祐方云串ノ
寸法射鏡ニ

横串五寸内のり四尺三寸立串土より上三尺七寸土打入分一尺二寸斗串のふとさ口一寸四分檜木にて丸くすへしさて黒くぬるへし土に入る分は八角なるへしトアリ法量物ニ見タルモ是ト丸物草鹿ノ塚ニモ寸法ノ法量アルヘカラ同シ

ス射鏡ニあつちの高サ三尺九寸よに四尺八寸兩のわきの廣サ三尺五寸ツ、也上の横は六寸はかりまはりに可築あまりすはれはあつちのなりわろし大方此分にて見てよき様に可拵ト見ヘタリ此寸法ヲ考ルニ立串ノ高横串ノ廣ヨリハ少ツ、高ク廣ケレハ鬮的聞書ノ説ニ大概附合セリ此法量ヲ手本トシテ高底廣狭ハ心任ニ作

へシ法量ナシ寸法ニカ、ワリ一概ニ思へカラ

ス丸物草鹿ノ塚イハ小塚アルヘカラス

但シ塚ト少シ

間ヲ置丸物ヲ立テ射ル事ナレトトシテハ塚
アル上ニス布皮ヲ張り塚ト布皮ト二重ニシ射
ル事モアルヘシヤ射鏡ニ革のある圓物をはかち
笠然と云也ト見エタリ又武田信豊ノ記書名丸
トアニ圓物射場ノ圖アリ其圖ニ塚ト丸物トノ
間ニ布皮ヲ立タル圖ナリ鬮的聞書ニ丸物など
の時一手四目にテ射はねこかきをあつちにか
けて射へし又あつちもくつれなとする時もね
こがきをかけて射るなりトアリ彼レ是レ合考
ルニ四目ヲ塚ニ射付テハ四目損シ易シ四目ノ
損スル事ヲ厭ニテ布皮ヲ用ヘ四目ノ助トシタ
ルモノナランカ常稽古ノ時ハ布皮ヲモ不用布
皮ノカハリニネコカキヲ用ヘタルナリ鬮的聞
書ニ丸物あつちにねこかきかくる事は本式の
儀にてはなしはれの時はすましく事也トアリ
是レ稽古ノ時ナトニ用ル事ノ證ヲ知ヘシ又ね

こかきトハネコタト云モノニ
テ今ノ世ムシロノ事ヲ云ナリ

一 丸物ノ巡^リニ砂ヲマク事射鏡ニ的のうしろあつ
ちのきはよりの前弓杖一杖斗石もましらぬ
こすなをあつくとしくへしト見ヘタリ如此砂
ヲマキタルハ化粧ニシキタルニハアラス丸物
ヲ勝負ニ射ル事アリ其時矢沙汰セル用アリテ
砂ヲシキタルモノナランカ能ク知ラン人ニ尋
ヘシ

一 矢取塚ノ事小笠原ノ古書貞丈先生ノ圓物ノ式
ナトニハ不見武田信豊ノ記

丸物禮法
ト云書也

ニ後ノ方

二矢取塚ト圖アレト其作様ハ不見小的場ノ矢
取塚ノ如ク作ヘシ

一弓立ノ事武田信豊ノ丸物弓場ノ圖ニハ数塚数塚

ノ制大的場ノ 数塚ニ同シ ヲ前後ニ築キ数塚ノ前的ノ方ニ

弓ミゾアリ其前ニ矢代場トモ云ヘキ如ク小キ

砂ヲシキタル圖ナリ貞丈先生ノ丸物式ニハ数

塚ヲ不設地杭トテ檜ノ木ニテ小口ノ徑徑リ一寸

位ニ丸ク削リ此杭ヲ土ヨリ上三分斗頭シテ五

本弓場殿ノ通りヨリ少シ退ケ打始メ後ハ段々段

的ノ方ヘヨセテ打是ヲ射手立所ノシルシ弓立

トシタルモノナリ右二書ノ趣キ小笠原ノ古書
ニハ不見當サレ_両武田伊勢ノ两家ハ別格ノ家
柄ナリ此家柄ノ書ニ出タル事ナレハ本證トス
ヘキ事ナリ

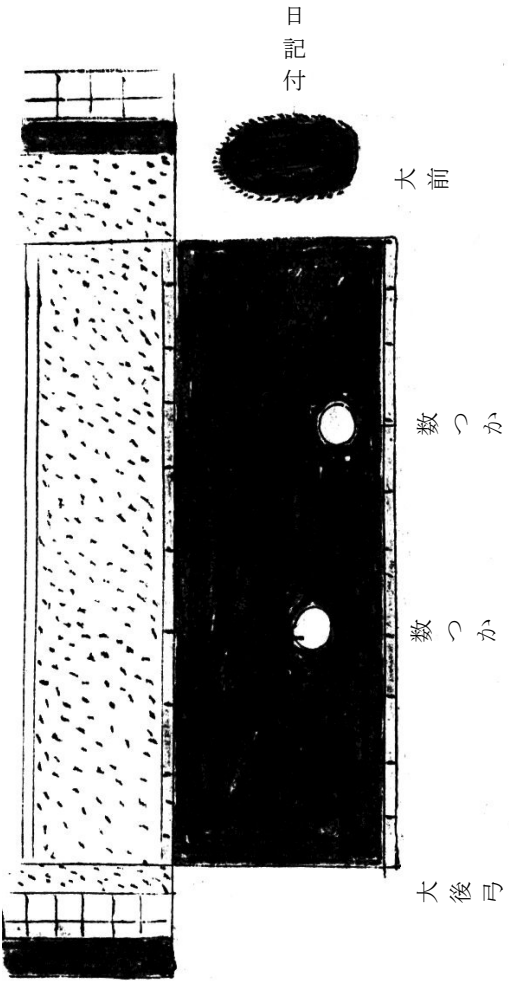
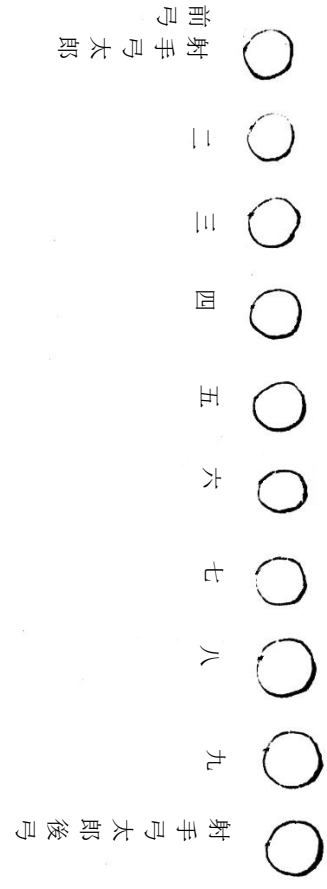
一 埒ノ事信豊ノ圖ニハ前後共矢取塚ノ通りヨリ
弓溝迄芝ヲ伏セ其上ニ埒ヲ結ヒ芝ノ際ニ砂ヲ
シキタル圖ナレ_両埒ノ結ヒヤウ芝ノ伏様何共
記シナケレハ詳ナラスト云_両此等ノ事ニ定法
ナトハアルヘカラス心任ニ作ヘシ又貞丈先生
ノ圖ニハ前後ノ通り芝ハ伏セタレ_両埒ヲ結ヒ

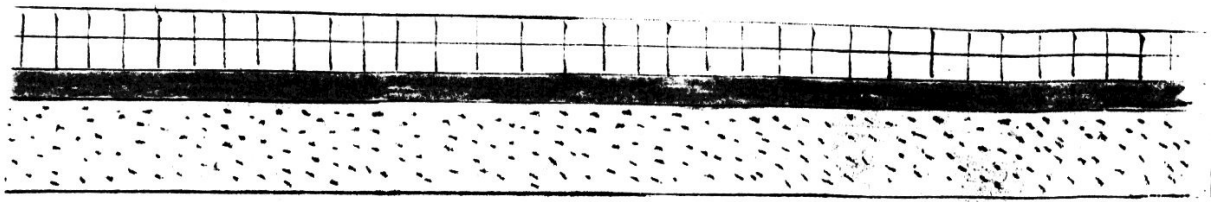
砂ヲシキタル趣ニハ見ヘス此等モ所好ニ任テ
作ヘシ

一 弓場殿ノ事小笠原家ノ古書ノ類武田信豊ノ記
ニ見ヘスト雖貞丈先生ノ圖ニ見ヘタレハ大的
場ノ弓場殿ノ如ク作ヘシ

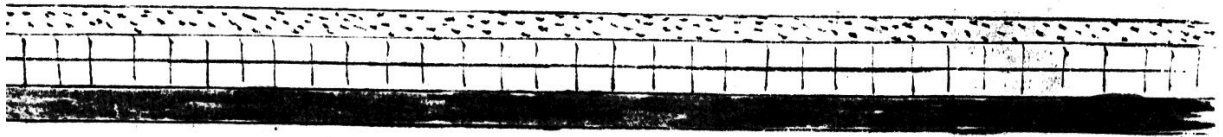
圓物禮法

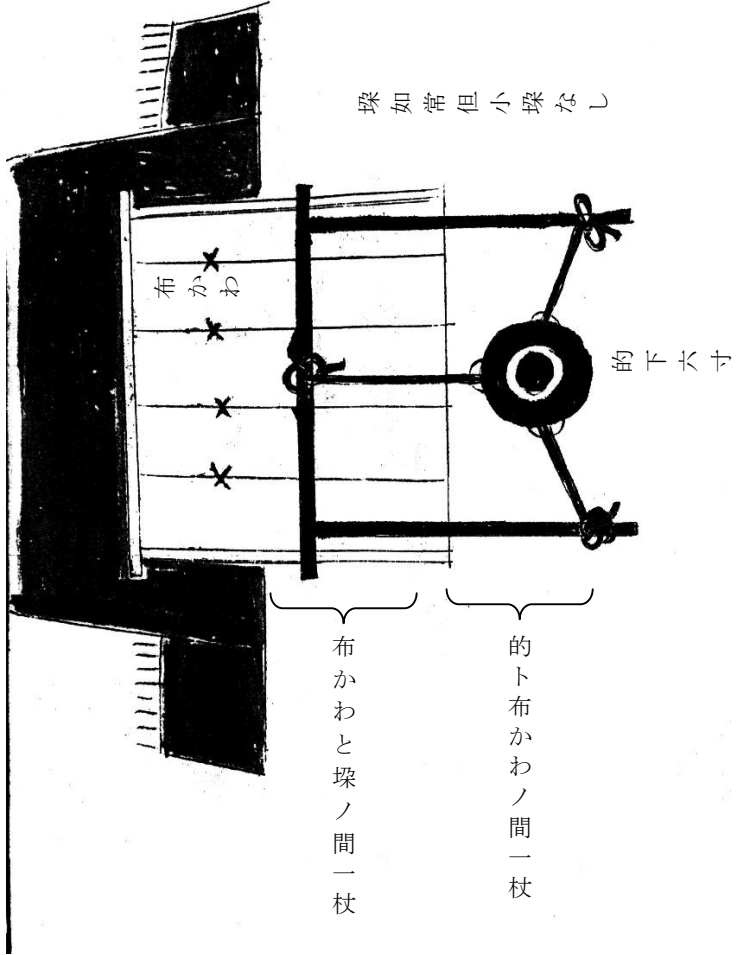
弓場之繪圖



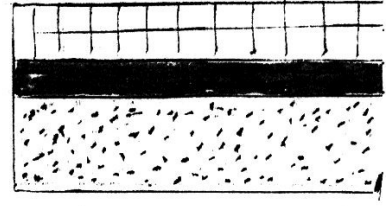


弓場はきやう如常式

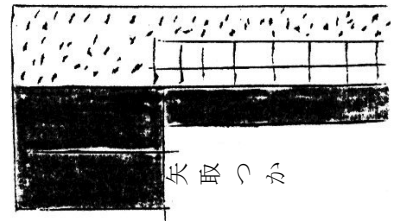


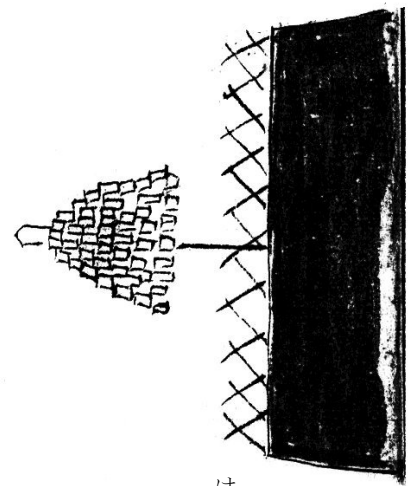


塚如常但小塚なし



物間九杖





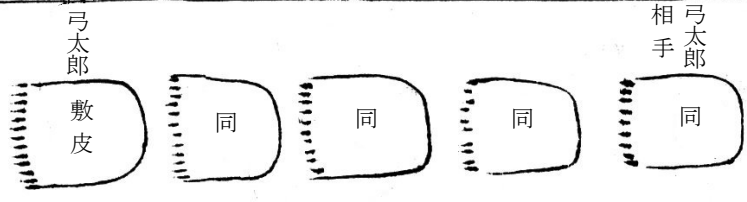
けしやう串廿八

こと

弓場経営大方繪圖のとし其所の廣させはさ
にて相應にはくへき亘故實也圓物を小的場
にかけても射つ也是はかくへ別の儀也圓物
弓場とてはく時は塚に小塚をすへからず

右ニ摸写シタル丸物弓場ノ圖ハ武田信豊ノ記
ニ出タル所ナリ左ニ伊勢氏ノ圓物ノ式ニ見エ
タル圖ヲ掲ル合見ヘシ

弓立ニツクトキハ
 前弓ト後弓ハ向合
 テツノコトクツク
 ヘシ中弓ハ的ニ向
 テ少シ馬手ヲヒラ
 ク心ニツクヘシ

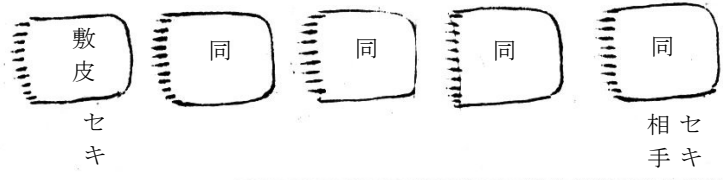


日記付アラハ此迄ニ射手
 ノコトク敷皮シキテアルヘシ

如此ニ座スヘシ人数ハ不定多
 クトモ此通ニサスヘシ○弓場
 ニモヨルヘシ落アルトキハラ
 チハ後口座ニツクヘシ

前ノ座ト後ノ座ノ間ハ四杖
 クラヒナルヘシ場ニヨルヘシ

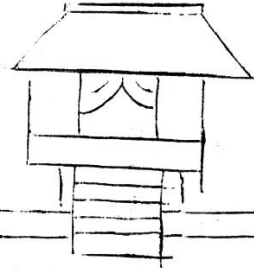
此座ヨリ弓立迄ハ
 三杖クラヒナルヘシ



弓場ノ口此ヘシニアルヘシ

弓場のはば所ニヨルヘシ五杖カ七八杖ニモスヘシ

弓場殿



報ノノクク

弓立ヨリ
一矢代マテ
杖半テ

前弓



地杭也

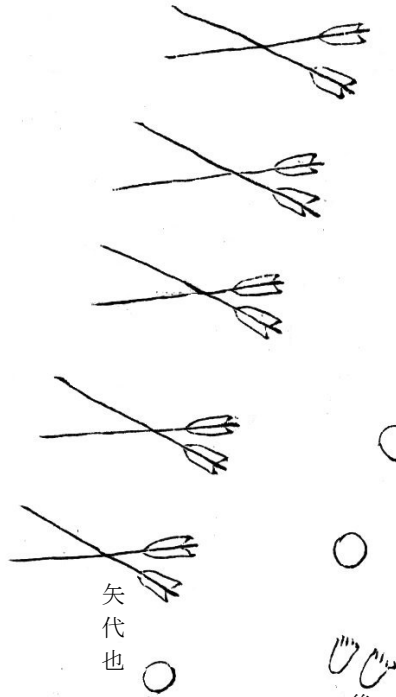
中弓

同

同

中弓ハ何人アルトモ此ニツク
也弓ノウラハスヲ地杭ニカクル
クラヒニツクヘシ

前弓ノ弓立



矢代也

後弓

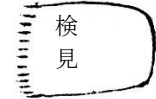
報ノノクク

初ニ矢代ヲトリアツムル
トキハ矢代フル人此ヘン
ニツクハヒテ矢代ヲトリ
アツムル也

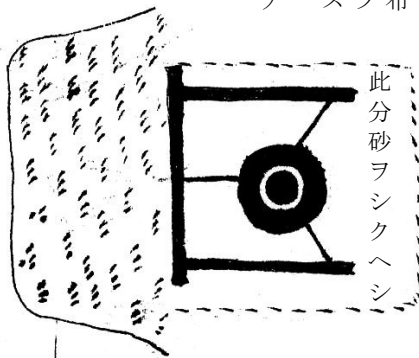
地杭ハ口ノ徑一寸クライノ
檜木ヲ丸クケツリテ地ニ打
込テ三分斗出シヨクナリ射
手足フミヲシテ立トキハ弓
手ノ足ヲ杭ノ間ハ三尺五六
寸斗也ウシロハ〇々ノ方
ヘヨスルナリソノ分量ハ一
尺三寸斗也

右ニ出シタル射場ハ伊勢氏ノ圓物式ニ見エタル圖ナリ信豊ノ弓場ノ圖トハ小異アリイツレ

檢見アラハ此
 ヘンニシキ皮
 ニ座シテアル
 ヘシ



アツチナキトキハ布
 皮ヲハルヘシ又アツ
 チニタハミヲ立テス
 ルヲモアルヘシ又
 アツチヘネコカキヲ
 カクルヲモ右出ニ
 ミヘタリ



此分砂ヲシクヘシ

山ニテイノ十ノ坪

弓取ハ
 此へン
 ニ居ル
 ヘシ

ヲ是トシ彼ヲ非トシカタシ共ニ家柄ノ説ナレ
ハ本證トスヘキ書ナリ考ヘシ

筒結場

流傳曰筒結ト云モノハ弓馬故實

記者伊勢六郎
左衛門尉平

貞順天文永祿ノ

頃ノ人ナリ
法量之卷

卷尾ニ文安三年六月
廿九日沙弥浄元弘治

二年八月日信豊トアリ
信豊ハ武田左馬助ナリ

ニ見ヘタレ
氏筒結ノ射

場ト云モノハ不見其外小笠原家ノ古書ニ不見

當元來古代ノ筒結ト云モノハ

今世卷藁ト云モノ
ナリ委クハ下

鵠ノ部
ニ出ス

弓ヲ射習フ器器ニテ内椽廊下又ハ座鋪しきナ

トニモ陶置キ是ヲ鵠メアテニ矢ヲ射付テ射術ヲ稽古

セルモノニテ人ニ射事ヲ施シテ見セルモノニ
ハアラス今當ハ卷藁前ト名付ケ其射禮アリテ
古昔ヨリ行レタル禮射ノヤウニ心得タル者モ
少カラスト雖皆近キ世ノ好事ノ弓家者流ノ所
爲ニテ故實ナト云々ハアルヘカラス故ニ筒結
場ト云モノヲ別ニ設ルモノニハアラス便利ニ
任セ内椽ニテモ廊下ニテモ座鋪ノ中ニテモ其
外何所ニテモ心任セニ立置ヘシ定法ナト云義
ハアルヘカラスト知ヘシ

ウチ

武利々々場

・『ぶりぶり』と読む
(現代弓道講座S.44 配本より)

06/01/14

流傳曰フリフリノ射場トテ別ニ造ルモノニハ
アラス丸物ノ射場ニ掛テ射ルモノナリ則鬪的
聞書ニふりくは本式なき物也略義の事也丸物
の串にかけて射る也六寸よりは少高くかくへ
し上賢抄にふりくと云て丸物などよりもちい
さゝ的をは同丸物の如くくゝりて射る事有是
は寸法定らす繩を付様は上に乳二あるへしそ
れよりの繩を付てよこ串にかけへし横繩はな
く上にはかりかくる也矢にあたりて横串の内
のりをくるくとまとふ事ありそれをは的を直

して又射る也此的に沙汰する矢などはなき也
是は中古の人のしいたしたる儀也射やうなど
は丸物などの如し的の寸法的のかけ様法式あ
るへからず但いづれも土の上は六寸の物也然
はふりくも同如くにかけてべし弓馬三冊にふり
く根本ふりなき物也射ゆうふりくのこしらへ
やう不定但丸物のことく也ト見へタリ此三書
ノ説ヲ以テ思フニ武利武利ハ丸物ヨリ工夫シ
テ人々ノ弓勢ノ強弱ヲ試シ争フヲ主用トシタ
レハ武利々々ノ射様ト云モノモ別ニ無之丸物

草鹿ノ如ク射ルモノナレハ射場モ丸物草鹿ノ
射場ニテ射ルモノト知ヘシ

遠矢場

流傳曰遠矢ヲ射タル事源平盛衰記平家物語參

考太平記

温故之記ニ委ク
評タレハ畧之

等ニ見ヘタル古昔ノ

遠矢ハ鏑矢根矢ヲ以テ遠ク射遣タルヲ云ニテ

遠矢繰矢ナト云別制ノ矢ヲ以テ射タルニハア

ラス何頃ヨリカハ遠矢

クリ矢
氏云

ト云別制ノ矢出

來此異様釣合ヲ設タル遠矢ヲ以テ頗ル遠町ヲ

射通ス亘盛ニ行ハレタレハ洛陽所々ニ遠矢場

ト云モノアリ武藝小傳ニ大庭量重力傳書ト云
モノヲ引テ都廻遠矢場ハ祇園之南八坂道京間
ニ合テ百八十間同所青塚貳百五間是ハ天下ノ
矢取也同取清水二百四拾貳間也此青塚ト申所
ヲ射初タル事天正ノ中比京ノ人又四郎ト申者
扱又祇園ノ者矢師ノ子彼亦兩人ノ者共射初テ
天下ノ遠矢場トナル元和ノ終迄四十年余國々
ヨリ射ニ上リテ矢先一寸壹尺ヲアラソヒタル
事也 関白秀次公被成タル遠矢場京吉田ノ西
三六ノ地蔵トウシノ宮トノ間二百間三条通ト

聖御院ノ森トノ間四方クリノ所蓮花座也右近
ノ馬場二百二十間也蓮臺野貳百四十間也関白
秀次公蓮臺野四町メノ道ニ判金十枚ナラヘ置
テ四町メノ道ヘ矢ヲ射付タル者ニ壹枚宛被下
タル事也此判金壹枚取タル者ハ小川甚平ト申
仁カトリタル事也又大和郡山ナラ海道ト申所
貳百五十三間是西ヨリ東矢落ニ射ル所也少矢
先サカリ成所也此矢所ヲ関野藤兵衛ト申仁射
ケタル様ニ沙汰仕候得トモ説也ト見ヘタリ如
此所々ニ遠矢場ト云モノ出來今當ノ射術ハ此

矢所ヲ射通ス叟ニ眼ヲ闇ミ指矢前ト云別種ノ
射事ヲ専ラ修行スル叟ニナリタレハ是カ爲ニ
射術ノ主用ヲ取失ヒタル名聞不實ノ師籛者モ
少カラス思惟アルヘキ叟ナリ

布皮

流傳曰大的ノ布皮ノ事高忠聞書別記ニ布革の
事は等持院殿横より始なり幕をはつしてかけ
られたり一幅みじかくていま一幅そへられて
今に布かはといふ也然る間六幅にするか本也
但布せはくは七幅にもすへし弓馬故實に布皮

の事笠然草鹿圓物などに有已也

祐方云此布皮ハ大的ノ布皮

ヲ云ナリ笠懸草鹿丸物ニモ布皮アルト云事ナ

リ笠懸草鹿丸物ナトノ布皮ハ大的ノ布皮ヨリ

二幅セハシ

下ニ出ス

木の串の外又別に竹にて串をして

立る也串の内のり長さ以下本くしの如く也布

皮も昔は五幅にて有し也少は、狭きとて中比

六幅に成たる也色はあさきたるへし長は串の

たけたるへし上をは縫めの中へ横くしの入横

にする也すそをは内へむひ返し五所に菊とち

黒革にてすへしト見へタリ此二書ノ説大粗ニ

テ詳ナラスト雖小笠原家ノ古書ナレハ本證ト

スヘキモノナレハ是ヲ挙タリ又大的式

貞丈先
生ノ記

ニ布皮又的革とも云布六幅也幅一尺貳寸の布
を用へし布せはしは七幅にもする長は玉尺は
かり也色は水色に染る縫根は幕の如くふせ縫
也上の方を四寸裏の方へ折返して袋のこどく
縫へし横串を入れる根に縫也上より一尺二寸下
けて藍革にて菊とちを縫目とに付へし素袍の
菊とちの如しすその方は六寸斗縫残しほころ
はし置て一幅毎に葛袴のすそくゝりの如く一
寸ほど折かへし袋のとく縫てひもを通す根よ

縫へし又一根あり右のことく縫て上の菊とち
をはれんぜんにもする也れんせんとは黒革を
丸く錢よりは大に切て縫目の上に付る也下の
ほころはしたつ前には素袍のことくなる菊と
ちを付る又一根あり上の方横串の入る根に物
かへして縫はす下も総を通す根もの縫めもあ
り是は畧儀なり圖下に見へたりトアリ此布革
ト云モノハ堀ナキ時的ノ後弓杖一杖間ヲ置テ
張り上前後三方ニ散ル矢ヲ防クヘキ爲ニ用ヘ
タルモノニテ堀アル所ニハ用サルモノナリ

矢以サ答的シモ倒弓拔ルニモテハニ的ノ所日
防テレシヤ射一布ス勢タモ弱コ右矢中ノ所ニ濱
ナ矢ハシテ射筋皮ス勢タモ弱コ右矢中ノ所ニ濱
レヲ詮方非ヲ弓矢ニテノホトナレハ心ナ頼シク思ヒタレ
ハ防クナヲトニ矢ノハ弓ハ勿論ノ事ニテアルヘキナレト
迷クモシ究メタキモノ弓トハ別ナルヤ問射倒
ハレノヲ以テ考ルニ貞丈先生緞ヲ
タト云ハレタ見ヘタリ大先生
ルモハレト見ヘタリ大先生
モハレト見ヘタリ大先生
ノハレト見ヘタリ大先生
ト見ヘタリ大先生
見ヘタリ大先生
ヘタリ大先生
タリ大先生
大先生

ノ説ナレト六ケシキ説ナリ
難用纒ノ事ハ別記ニ述ル

一布革ノ串ノ事的串ニ同シ横串七尺六寸内ノリ
六尺八寸立串土ヨリ上六尺六寸太サ小口ニテ
口二寸ト法量物ニ的串ノ法量見ヘタレハ此等
ノ寸尺ヲ本トシテ少ツ、ノ長短ハ心任セニス
ヘシ但シ大的ノ布皮ノ串ハ白カルヘシヌルヘ
カラス又竹ヲ折曲テセル亘モアルヘシ射鏡ニ
布皮の串はから竹をよくためてねほりにすへ
しトアリ弓馬故實ニ木の串の外又別に竹にて
串をして立也串の内より長さ以下本くしの如

く也トアリ其制シヤウハ丸物草鹿ノ布皮ノ串
ニ同シ下ニ出ス合セ見ルヘシ

丸物草鹿ノ布革ノ事布ハ、四幅ニシテ大的ノ
布革ヨリハ狭ク短シ其余ノ制ハ異ナルヘカラ
ス則射鏡ニ圓物革布の事革布は四幅なるへし
色はあさきたるへし上をは袴のすそのことく
にぬひてそのくゝりのうちよりよこ串を指へ
し下をばくゝりむひにして細き繩を引とをし
其繩のあまりを布革の串に二まとひくて其繩
を的かけたる繩のふとさは的かけ繩のふとさ

程成へし革布の上のぬひめから八寸さけてと
ち革あるへし其革は弓袋のとち革のやうにす
へし三所に有へし串をは竹にてすへし同は根
ほりの竹可然串は的串より長さ矢たけをきて
可定横串四尺六寸内のりは四尺二寸立串は土
より上三尺八寸土に入分一尺二寸ふとさ口一
寸二分斗ト見へタリ大的ノ布皮ハ六幅丸物草
鹿ノ布皮ハ四幅布幅ノ多少ノ替ル而已ニテ其
外ハ大的ノ布革ノ如クナルへシ串ハ竹ニテ折
掛串ニスへシ此横串四尺六寸トアルヨリ以下

寸法折カケ串ンハアラズ木ニテ作ニ串ノ寸法
ヲ云タルナリ竹ニテ作ルニモ此寸法ヲ用ヘシ
一折掛串ノ拵様ノ事高忠聞書別記ニ竹をかやう
に折然て後の串をはなからへたとをしてくる
也前の串をはさしわたして後の串の際にて切
る也三所後より釘をさして表へ見えぬ様にし
て三所おなわにて三卷ツゝまきて後に結ひめ
をもとめて丸物をかくる也弓馬故實に折然串
と云事中畧竹を用也ふとさ長サは本串の如く也
豎串の長横串の内のり以下本の串に同し兩方

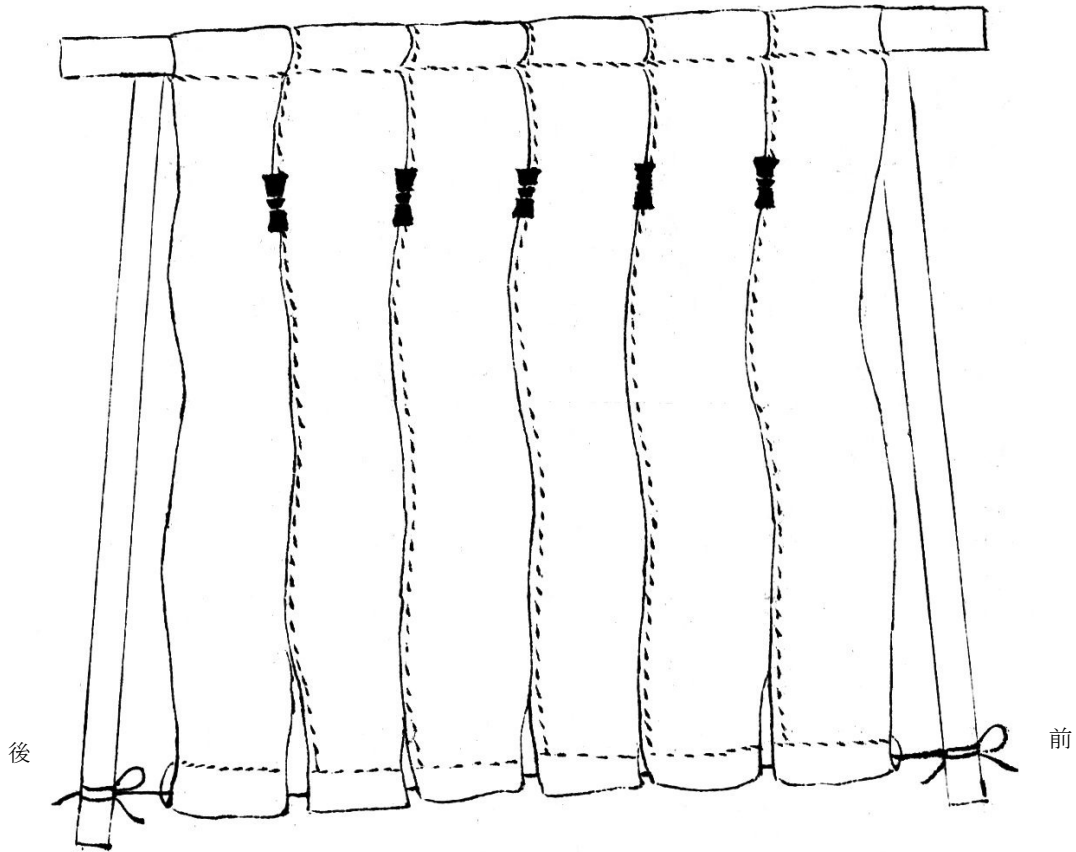
の末を折然て前の串のうらをは後の串たへし
うしろの串をはうらの中程まで切へし前の串
のうらをは前に置うしろの串のうらをはうし
ろに置て芋縄にて三所結也結目うしろの方に
有へし三卷まきて男結にして切へし又縄めの
下におもてへみ元ぬやらに竹釘をさすへし兩
の豎串の本に一寸はかり置て節を置へし是を
折然串と云也ト見へタリ根ホリノ竹射鏡ニ見
へタリ
ヲ折掛ケ祐方云青竹ニ火
ヲ入折掛ルナリテ如右作りタルモノ
ナリ丸物草鹿ノ布皮ノ串ニハ此折掛串ヲ用ル

ナリ

布革ノ圖

上の方を折かへし○横
串を通し上の方に菊と
ちを付らる圖

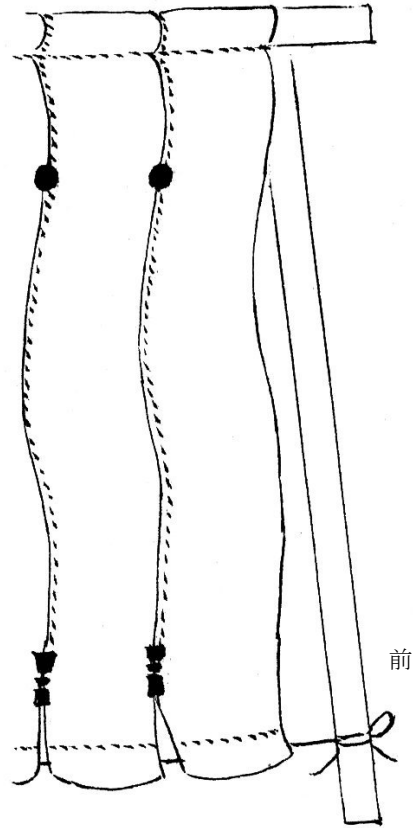
布革四きに細き黒
革を付て串ニユニ
付ルユニモスルナ
リ



下には一幅ことにほこ
ろはし細緒を通し
の下に結ひ付ける
堅串

同布革の圖

上ニレンセンヲ付
下ニキクトヲ付
タル圖也

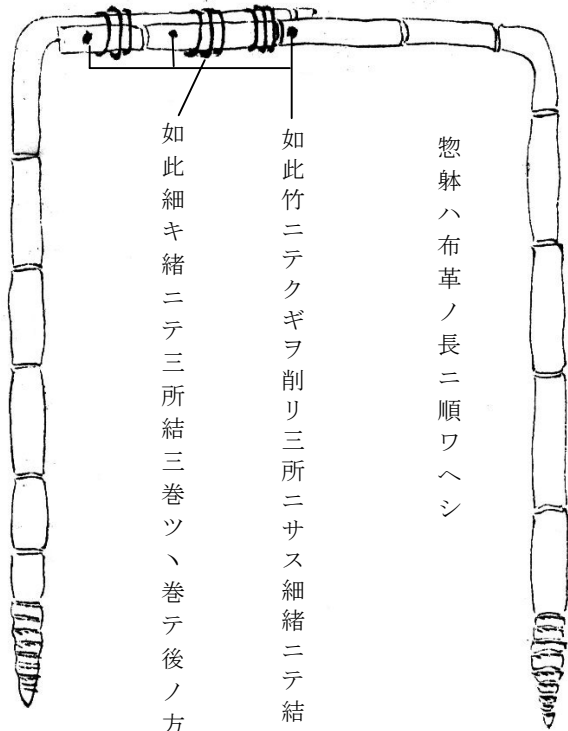


前

此半圖ニ写シヌ
タメナレハ畧シテ如
チヲ付タル所ヲ見ル
センヲ付下ニキクト
全圖ナレ上ニレン
祐方云此圖元本ニハ

折然串圖

惣躰ハ布革ノ長ニ順ワヘシ



如此竹ニテクギヲ削リ三所ニサス細緒ニテ結タル下ニ打ヘシ
如此細キ緒ニテ三所結三卷ツ、卷テ後ノ方ニテ結苗ル

前串

土ニ入分本串ト同シ

右ニ摸写シタ所ノ圖ハ土井主稅税源利往ノ改正

シタル大的式伊勢貞丈ノ著述也ニ見ヘタル布革ノ圖也

第一ノ圖ハ大的ノ布革ヲ串ニ張タル所ナリ第

二モ大的ノ布革ナリ第三ハ丸物草鹿ノ布皮ノ

折掛ケ串ノ圖ナリ